

特別編

深川の産業 — 漁業と流通 —

江東区深川江戸資料館

深川江戸資料館の常設展示室には、深川の産業を担った干鰯^{ほしか}や米を扱った店が再現展示されています。本号では、深川の産業について書かれている第 4 号（平成 8 年 9 月 16 日発行）を紹介します。

1. 深川獵師町

隅田川沿岸、今の永代・佐賀付近は、江戸の初期には舌のように突き出た寄せ洲^{よせす}でした。このあたりを開拓して漁業を営む人が現れて、深川獵師町が成立します。

彼らは摂津や紀州など上方から移住してきた人々といわれ、寛永 6 年（1629）に幕府へ開拓を願い出て許され、代わりに幕府へ魚介類の献上と、将軍御成りの際の役船の調達^{おな}が義務付けられ獵師町 8 か町が成立しました（通常、海の「りょうし」は「漁師」と書きますが、史料の中では深川の場合「獵師」と記されています）。

以後、深川獵師町は江戸湾、つまり「江戸前」漁業の一翼を担ったのです。富岡八幡宮例大祭の神輿連合渡御で、^{しんがり}に登場する「深浜」の神輿は町内の枠を越えた、かつての獵師町の神輿です。

2. 掘割りと流通

寛文・延宝の頃（1661～1681）、海上航路として西廻り航路・東廻り航路・南海路が成立し、集荷市場としての大坂（物資の送り手）、消費市場としての江戸（物資の受け手）という位置付けが明確になり全国市場が形成されました。

ちょうどこの時期の深川は、本所とともに明暦の大火（1657 年）後の江戸再開発により土地の開拓と都市化が進み、町場や寺社、旗本・御家人の屋敷が増加している時期でした。さらに、全国から江戸に運ばれてきた物資の集積地として機能するように、縦横に掘割りが作られたのです。

すでに天正 18 年（1590）に徳川家康が江戸へ入ってすぐに開削された小名木川のほかに、1630 年



食糧ビルディング正面（深川正米市場跡・佐賀 1-8）

代から 40 年代にかけて仙台堀が作られ、さらに 1650 年代後半から 60 年代にかけて、堅川・大横川・横十間川が本所奉行の徳山五兵衛・山崎四郎左兵衛門により開かれました。また、江東地域の流通が盛んになったことに伴い、寛文元年（1661）には小名木川の西側河口付近（隅田川との合流地点）にあった川船番所が、東側の河口（中川との合流地点）に移動して、物資や人の監察に当たることとなりました。

こうしたなかで、元禄 14 年（1701）の木場の成立は、物資集散の拠点としての深川の役割を決定付ける出来事でした。こののち、300 年近い木場の歴史が始まったのです。

3. 米と干鰯の流通

深川の間屋の中で、特徴的だったのが米と干鰯の間屋です。米は江戸時代の年貢の代表であり、全国的な流通機構がありました。また干鰯は、鰯を干して肥料としたものです。さらに肥料とあわせて油分を灯油として販売していました。

(1) 米の流通

米の取り扱いは幕府や各藩が年貢米として徴収したものが市場に出たものと、商人が産地から買い集めて市場に出たものがあり、前者は札差や御用達商人、各藩の蔵屋敷などが換金業務を行っていました。ことに蔵前に集中していた札差商人は、幕府の年貢米を旗本や御家人といった幕府の家臣団にその禄高に応じて割り当てる業務を行っていましたが、やがて旗本などに金融も行うようになり、莫大な財産を築きあげました。彼らの吉原などでの豪遊ぶりが、エピソードとして残っています。

後者の商人米は、下り米問屋（上方米を扱う）・関東米穀三組問屋（東北関東の米を扱う）そして地廻り米穀問屋（同じく東北関東の米を扱う）などが取扱っていました。

問屋に集められた米は、仲買商人の手を経て市中^{つき}の春米屋によって精米され庶民に販売されました。なお、常設展示室内に春米屋が再現展示されています。

深川には掘割りを利用して各藩の蔵屋敷などがありましたが、やがて幕末に近い頃から米商人が深川に本拠地を移して営業するようになり、倉庫としての役割から取引の拠点へと成長します。そして明治19年（1886）には、深川正米市場が深川佐賀町に開設されました。その後、関東大震災で焼失しますが、昭和2年（1927）に鉄筋3階建てのビルに建てなおされ、「食糧ビルディング」の名で平成14年（2002）まで現存していました。ここが正米市場の本拠地で



江川場売手中奉納の狛犬（富岡八幡宮）

した。また三井・三菱・渋沢などの財閥系の米穀倉庫もでき、米流通の中心地となりました。

(2) 干鰯の流通

房総地方で捕れた鰯は畑の肥料として江戸時代には欠かせないものでしたが、その集散地が深川にあり、総称して干鰯場といわれました。

下表は干鰯場の一覧ですが、元禄～享保年間（1688～1736）という、農村でも商品作物（販売を前提として栽培された作物）が作られはじめた頃で、干鰯の需要も伸びていった時期と一致します。

干鰯場は銚子場と江川場をあわせて銚子場組、永代場と元場をあわせて永代場組と呼ばれ、それぞれ干鰯商人によって運営されていました。開設当初は日本橋周辺の干鰯商人が中心でしたが、幕末に近い時期から深川で営業する新興商人が台頭し、干鰯場運営の中核を担っていきました。

深川の干鰯場

名称	成立年代	所在地（現住所）
銚子場	元禄 9 年（1696）	白河 1 付近 現区立白河小学校周辺
永代場	元禄 14 年（1701）	佐賀 2-9 付近 旧西永代町
元 場	宝永 6 年（1709）	佐賀 1-16、17 付近 旧小松町
江川場	享保 15 年（1730）	冬木 8、9、10、11 付近 旧和倉町

4. 終わりに

江戸の「川向こう」とよばれた深川は、「蔵の街」として発展しましたが、江戸末期には流通の拠点として成長しました。これは現在でも同様に深川の地域的特徴としてあげられます。

こうした歴史のなかで、深川には材木や米などの大問屋の主人や仲買い商、裏長屋に住んで天秤棒をかついで売り歩く「棒手振り」商人、大店の奉公人、さらに職人などとさまざまな人が住み、流通物資が全国から集まり周辺地域と密接に関わりながら発展する活気ある町となりました。

発行にあたり、当時のものを一部加筆・修正しました。